

---

# 天に輝く日輪の如く

まどろみ猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天に輝く日輪の如く

### 【Nコード】

N4170Z

### 【作者名】

まどろみ猫

### 【あらすじ】

時は戦国、処は安芸の国。下級武士の娘である小菊こぎくは、突然の事態に戸惑うことしかできなかった…。安芸の国のみならず、中国地方を統べる冷酷なる策略家・毛利元就からのお呼び出し。拒否などできるわけもなく、殺される覚悟を決めた小菊は、高松城へ連れて行かれる…。

日輪の申し子と、小さな菊花のような娘。他者を拒み孤独に生きる青年と、他者の幸せを願う心優しい娘。

これは、そんな二人の、目には見えない『愛』の物語…。

## 小さな菊の花（前書き）

はじめまして、まどろみ猫と申します。小説を書くのが趣味です。慣れないパソコンで、人生初の投稿です。

読んで下さる方へ。私は、少しでも上達したいので、できれば感想やアドバイスをお願いします。厳しいお言葉も、自らの糧にしたいと思っております。…ですが、登場人物への批判はおやめください。

この作品は、戦国BASARAの二次創作です。毛利元就様に、幸せになっていただきたいと書きました。しかし、元就様のキャラが崩壊しておりますので、無理と感じた方はお逃げください。

以上、わかったよという方はお読みください。

## 小さな菊の花

「小菊！小菊はおるか！」

屋敷に響く、父上の声。

縁側で、美しく咲き誇る桜を眺めていた私は、驚いた。

「父上！小菊は、ここにおります！」

普段温和で滅多に大声など出さない父上が、あのように必死に私を呼ぶなんて、何事かあったに違いない。

「小菊！…うう」

「ち、父上！？」

駆け寄ってこられた父上は私を見るなり、泣きだしてしまわれた。「どうされたのですか、父上？」

尋ねても、溢れる涙を拭いてもせずに男泣きにくれる父上。

…父上の涙を見たのは、あの日以来。母上が、亡くなった日。困惑と、不安。それらが胸中に、じわじわと広がっていく。

「…こ、こぎくを…そなた、を…」

「？私が、どうかしたのですか？」

しゃくりあげながらも、父上は言葉を紡ぎだす。

「元就様が、小菊を、た、高松城に、連れてこい、と…」

一瞬、目の前が真っ暗になった。

「わ、私を、ですか？この中国地方を統べていらっしやる毛利元就様が、そうおっしゃられたのですか？」

有り得ない。何かの、間違いだ。そう、思いたいのには。

「高松城から、使いが来た…元就様が、直々の文を…」

父上が握りしめて、くしゃくしゃになってしまった文。

震える手で、受け取る。とても綺麗で読みやすい字が、目に入る。

「貴様の娘を、我が居城である高松城へ連れてこい。従わなければ、貴様の家は取り潰す」

記されている名は、毛利元就。安芸の国の君主にして、中国地方

を統治する、冷酷なる策略家。

「…一体、どういうことでしょう…」

下級武士の娘である私と、元就様に面識などない。なのに、どうして。

「…儂にも、さ、さっぱり、わからん…。あのお方が考えておられることなど…」

そう言うと、父上は再び号泣し始めた。

私は、ただ茫然とすることしかできない。

暖かい風が吹いて、庭の桜の花が、宙を舞った…。

道中、お迎えの輿の中で、私はほんやりと考えていた。

お城に着いたら、どうなるのだろうか。殺されるのかもしれない。

「…理由くらい、教えてくださるかしら…」

四角く切り取られた、青空。香ってくる、花の、優しい香り。

今日が見納めになるかもしれない世界は美しく、輝いて見えた。

片田舎の下級武士の屋敷と、国主のお城では、比較することがま  
ず間違っている。

「…すごいです…」

輿から降りて、広い広い部屋に案内される。襖も屏風も、決して  
派手ではないが、一目で質の良さがわかった。

一番良い着物を着てきたが、このお城の女中さんのほうが、良い  
着物を着ているかもしれない。

世界が、違うのだ。しみじみと、そう思った。

広い部屋で、一人座している間、ずっと父上のことを考えていた。  
母上に先立たれ、後妻を娶ることなく、ただ私の成長を楽しみに  
して、不器用な愛情を注いでくれた父上。

女の身でありながら、学ぶことを好んだ私を、笑顔で褒めてくれ  
た父上。

木に登って降りられなくなった私を、助けてくれた父上。

お城からお迎えが来たときも、泣いていた父上。

『儂が泣くのは、そなたが嫁ぐときと思っておったのに……』

何も、言えなかった。無事で帰ってまいりますなどと、果たせるかわからない約束は、できなかった。

生きるか死ぬか。私の命は、元就様の掌の上。

二度と、会えないかもしれない。…嗚呼。

「…別れの言葉も、感謝の言葉も、言えなかった…」

後悔、している。何も伝えられなかったことを。

そうして、私は独り泣き始めた。

襖が、静かに開かれた。

部屋に入ってきたのは、一人の年若い男性。

私は慌てて涙を拭い、顔を上げた。

「……………」  
無言で、男性は私を見つめている。無表情で。

(こ、この方は一体どなたなのでしょう？ずいぶん細身で、お顔が整っていらつしやる…ああ、なんだか視線が痛くて、整っておられるから無表情なのが余計に怖いです…)

突然の男性の登場に、混乱した私の口をついて出た言葉は、

「あの、その…こんにちは…」

しどろもどろな、挨拶だった。

「……………」  
男性は無表情なまま、私の前に立った。

(…お、怒らせてしまったのでしょうか！？なんだか、眉間におしわができているような…)

「……………」そなたが、小菊か？」

広い部屋に、静かに響いた男性の声は、氷のように冷たかった。耳を疑うほど冷たいその声に、背が震った。

「は、はい…私が、小菊ですが…。あの、あなた様の、お名前は…」

「？」

見上げた男性の口が、ゆっくりと開かれる。  
「我が名は、毛利元就。日輪の申し子なり」

## 小さな菊の花（後書き）

…この作品を、読んで下さった方はいらっしゃるのでしょうか？  
他の方々が投稿された作品を読んで、ますます自信を失くす私です。読むのと書くのでは大違い…でも書きたい。そんな私のことを馬鹿だと思われた方はいらっしゃるでしょうが、それでも私は書き続けます。

投稿は、時間が許す限り頑張ります。小説を読むのと書くのを至福とする私ですが、仕事もありますので不定期となってしまうでしょう。それでも…読んで下さる方がおられたら…嬉しいですよ。

最後に。読んでくださって、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4170z/>

---

天に輝く日輪の如く

2011年12月14日12時45分発行